

平素は、弊社商品にお取り組み頂き、
まことに、ありがとうございます。
月間通信 11 月号をお送り致しました。
何卒、よろしくお願い致します。



そういえば、先月も此処スターバックスで書いていた。
今日は家を早めに出て、此処からなら近いであろう
『靖国神社』に参拝しようと思っていた。いたが今にも
振って来そうな空のうえ、天気予報では雨が長く続く
とあって、実は降っていないのだが、またチャンスはこれ
からもあると思い、此処に来た。2 階の大きなガラス窓
から『神田駅北口』という交差点が見える。往来する
人は誰も傘をさしていない。丁度昼時という事もあって、
満席に近い。此処に来る前は近くで蕎麦を食べた。これ
も先月と同じ店。食べたメニューは『温 ジャンボゲ
ソ天そば』というのにした。ゲソが硬くて、これなら天
かす蕎麦だかと思ったが、頑張れば歯が立った。『成せ
ば為る何事も』と鐘が鳴った。

さて今月は、いきなりだが『他界』という言葉につ
いて考えてみたい。上手く考えられるかどうか分からな
いが、昨日摂津からの帰り道、どうにもこれだけ我が儘
を通して今尚我在るは『物わがりの良さ』と『どんな
困難にも対応する知恵』が湧くように、親が生んでく
れたからと思い返していた。

私たちが生きている処を 日本語では『世界』と
呼んでいる。いつも書くけれど『世』は時を表し、
『界』は空間を表している。では、肉体を失う事を
『他界した』というなら、それは何処か他の空間に行く
という意味ととれる。他世界とは言わないので、そういう
意味では時はそうなるも尚共有している事になる。
『時』は太陽が昇って沈み、また昇って来るまでを一
日と、或いは 24 時間と決めている。但し、これは地球
の地表を基準としているだけで、遠い宇宙にでも行け
ば其処には太陽が昇ることも沈む事も無いので、その
現象はまるで別物のようだ。別物のようだとは存在は
同じだが、進み方、つまり速度が別物だと言っている。

他の空間に行くと、時は尚存在するが進み方が違
うので、時の場所を自由に行き来する事が可能な気
がする。地表に居れば時の進み方が太陽を周回した
り、自転したり早さに縛られて、過去にも未来にも行
く事が出来ないの、時に縛られるとは『今』に縛ら
れている事になる。先の画像は小豆島で 4 年ほど前か
ら飼っているメダカである。今は 6 匹になった。先週一
番生命力に乏しそうな一匹が底に沈んでいた。時々
追い回されたりして、殊の外可愛がっていたが残念
だ。だけど、2 年ほどよく生きてくれたと思っている。
でも、メダカは 2 歳なんて知らないだろう。最初から
いるメダカは 4 歳になる。でも、4 歳なんて意識してい
ないだろう。そもそも彼ら彼女らに朝と夜はあっても
時は無いだろう。人間は目や耳や鼻や舌や肌や、とり
わけ意識があるので時間の概念を理解できる。出来
るから縛られているのだと思うが、意識からすら抜
け出ると、其処は時間が存在しても時系列からは解
放されている。若い頃はこの空間を『気の場所』と考
えていた。今なら『エネルギーの場所』と考えると
実感がわく。此処がおそらく『他の場所』だろう。
此処には時系列に関係なく、『すべてが此処にある』
と思える。

此処に来れば、過去も未来も今に集約され、存在している。物わりの良さの反意語は何だろう。『無駄な抵抗』だろうか。すべてが此処にある処に無いものをいくら望んでも、それは当然この世に無い物だから、いくら抵抗してみても無いものは無い。

今話題のデレク・ジーターの描いている事はこの世に無い。彼は野球をしながら野球を否定した男である。私自身がそれを知ったのは随分前の事となる。それは第一回の WBC での出来事だったから、調べれば 2006 年と 20 年も前の事のように。時が経つのは早い？ WBC を知らない人には申し訳ないが飛ばして読んでもらいたい。前回の WBC の決勝を米国と戦う時、大谷翔平は『今日だけは懂れるのをやめましょう』と言ったらしい。第一回のキャプテンだったイチローがみんなに同じ事を米国戦の前に言い、『塁上でもメジャーリーガーにヘラヘラした挨拶をするな』『なめられるだけだから』と檄を飛ばしたらしい。ところが当時ロッテオリオンズに在籍していた西岡という選手が、同じショートストップを守る、先のデレク・ジーターに挨拶をしてセカンド塁上でヘラヘラしていたらしい。無理もない、メジャーリーガーのトップクラスで名門ヤンキースのキャプテンだから。日本流に言えば心・技・体を兼ね備えたいわば英雄的存在だった。ところが、実際に MLB で戦っているイチローにしては『油断できない奴』と正確に彼を見抜いていたのかも知れない。その西岡が三塁に進んだ時、打者がレフトにフライを放った。犠牲フライだ。キャッチすると同時にホームへ走り込んだ。セーフで 1 点が日本に入った。そうすると、その西岡が懂れていたジーターは、三塁塁審に、『離塁が早かった』とアピールした。その判断審判の球審はこれまた米国に特別な思い入れをしている米国白人だったので、当然それを認めて『アウト』のコールをした。日本の王貞治監督は、左利きなのに右手の人差し指を立てて、横に『NO NO』と振りながら抗議したが、当時は今のようビデオ判定が無い時代だった。が、テレビ放映なので繰り返し、離塁はグラブにボールが入ってからと、ビデオテープは明らかにしていた。ジーターにとっては米国が日本に負ける事など、あってはならなかったのだ。

気持ちは分かるが、それは別物だ。遣っている事は野球であってジーターの思い入れではない。野球で名を馳せている人間が、その野球のルールを否定して我を通す。その時の彼の顔は今も覚えている。権力者が、俺がルールだよと言っている顔だった。でも、『すべてが此処にある』ところにそんな権力は存在しない。存在しないものを存在するかの如く振舞っても、無いものは無い。母親に言われた『神さんはちゃんと見てはるで』である。その様に考えれば、すべてが此処にある処に行く事が出来れば、物わりは良くなるのだろう。

1964 年の事である。今とは別次元のナショナリズムを反映していた東京オリンピックの競技で、国技の柔道重量級(無差別級)でオランダ・ヘーシンクに日本の選手が決勝で敗れた。『柔よく剛を制す』日本の『気』を根本とする理念を代表した言葉だ。今の MLB でも、大谷や山本、トンネルから出て来た佐々木を観て、そこに気づき始めたような研究が始まっている。『198 円の 8 円を 9 円にしても販売点数は変わらない』と 9 円に、会社あげて切り替える事がトレンドとなっているが、いっそ 200 円にする『潔さ』がお客さんの心を打つのではないかと思い始めている。国技に拘るより、もっと本質的なところに立脚点を見出す努力をする潔さが、すべてを前に進めるのではないかと思う。誰かトライしてくれないだろうか。そうすると、スーパーマーケットは『安さを売る』事から解放されると思われる。

そのスーパーマーケットの社長と話をしていると、『自分は、突然正解の判断が湧いてくるように最近なった』と言っていた。驚いた。実は自分自身もいつの頃からかそうになっている。それだけではない、ひと目見ただけでその本質が見えてしまい、その先それらの行く末まで見通せてしまうようになった。その事に『どんどん自分は狂って行く』と思うようになっていた。ある程度の事を話する若い別な社長に言ってみたが、ピンと来ていないようだった。他界の話は実は此処に繋がる。先月も同じ事を書いた。身体は確かに此処にあるが、意識は『すべてが此処にある処』にあり、狂っているのではなく、其処に他の人もいようだ。

有限会社アルファー 吉田清一郎